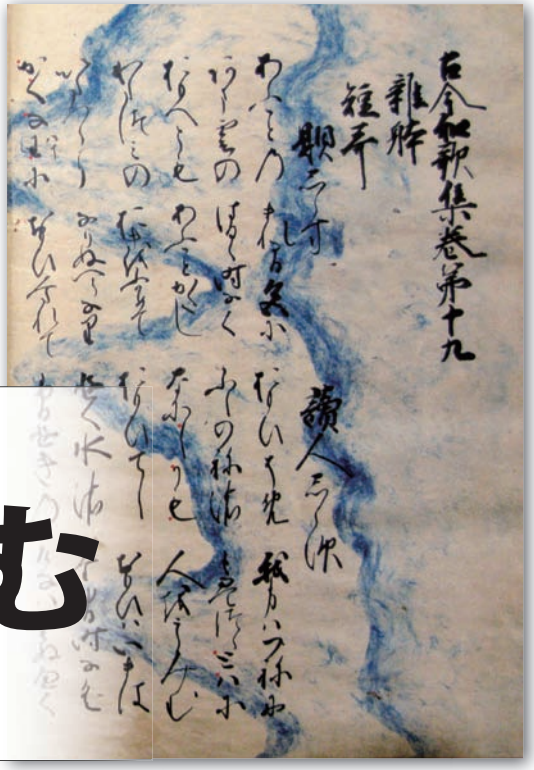
第１２３回 貴重書展

見る



読む

比べる

ドキュメンテーション学科による
—古典籍へのアプローチ—

Ⅲ

期間：平成２１年１０月２１日（水）～１１月７日（土）

鶴見大学図書館

ごあいさつ

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科による展示も今回で三回目となります。授業で学生たちが実際に手にとって調査した本学図書館所蔵の古典籍を、その調査結果をふまえて解説・展示しています。日本の古い書物の魅力を味わって頂ければ幸いです。（伊倉史人・堀川貴司）

展示書目

［Ⅰ］仏書のいろいろ

1．観普賢経私記　1冊　建保５年（1217）禅寂写
2．駄都法次第　1冊　文和３年（1354）尊恵写
3．〔観無量寿経四帖疏伝通記〕　１５巻１５冊　〔寛永初〕刊　古活字版
4．大疏百条第二重　1冊　〔江戸前期〕刊
5．観無量寿経和訓攷異　1冊　天保５年（1834）〔伊勢〕山田・無碍光社蔵版

［Ⅱ］近世版本のさまざま

6．初登山手習教訓書　1冊　寛永１３年（1636）〔京〕・中野市右衛門刊
7．〔吉原細見〕　1冊　延享２年（1745）〔江戸〕・鱗形屋刊
8．義貞艶軍配　５巻合１冊　寛延２年（1749）〔京〕・八文字屋八左衛門刊
9．色の千くさ　1冊　文政元年（1818）跋　〔京〕・銭屋惣四郎刊
10．小児全書　６巻６冊　安政４年（1857）刊　木活字版
11．倭洋妾横浜美談　３巻合１冊　明治１４年（1881）東京・船津忠治郎刊

［Ⅲ］歌集のいろいろ

12．古今和歌集　1冊　〔室町中期〕写・伝周興筆
　＊参考　続古今和歌集断簡　〔室町中期〕写・伝周興筆
13．後拾遺和歌集　1軸・零本　〔室町末〕写
14．金葉和歌集　1冊　〔江戸中期〕写
15．基俊集　1冊　〔江戸後期〕写
16．二条太皇大后宮大弐集　1冊　〔江戸中期〕写
17．千五百番歌合　１０冊　〔江戸中期〕写　永正１０年祐什元奥書あり
18．貞永元年八月十五夜歌合　1冊　〔江戸前期〕写

［Ｉ］仏書のいろいろ

鶴見大学は曹洞宗大本山總持寺を母体として創立された大学ですので、曹洞宗を含む禅宗関係の古典籍も数多く所蔵していますが、他の宗派によるものも幅広く集めています。「古典籍特別演習Ｉ（内典）」という授業で扱った本を中心に、近年収蔵されたものを紹介します。解説はやや専門的な内容にわたります。

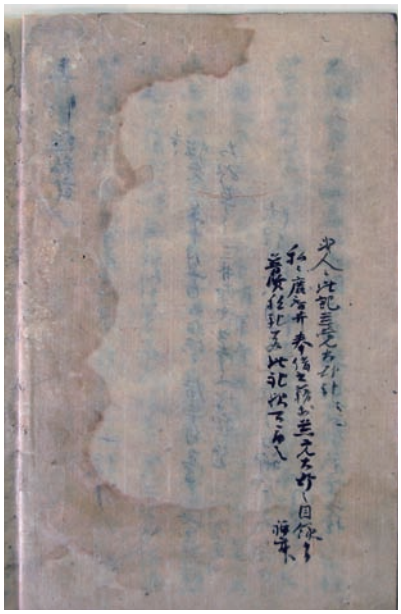
１．観普賢経私記（かんふげんきょうしき）大本１冊　建保５年（1217）禅寂写

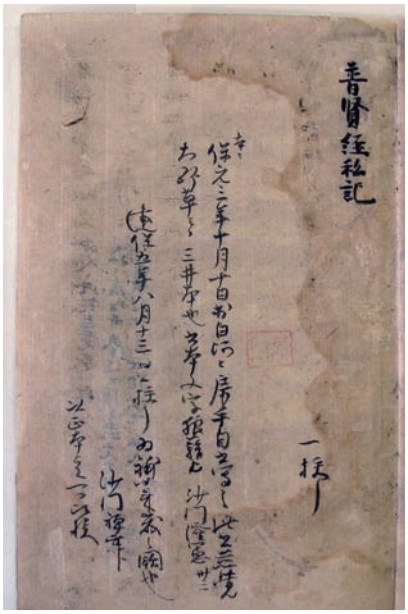
２５．５×１５．７糎、列帖装、楮打紙。表紙は雲母引地茶唐草文摺付、ただし左端０．６糎から５．０糎の間は摺付の紙を欠き、そこに外題打付墨書「□普賢経私記　如来蔵」、同筆にて右下に「覚阿」とある（共に本文とは別筆か）。巻首題２オ１行目「観普賢経私記」、巻尾題２７オ１「普賢経私記」。墨付２７丁・後遊紙１丁（一折７紙１３丁、二折８紙１５丁、残り各１丁は前後見返）、四周単辺有界（すべて白界）７行２１字前後、漢文（白文）。奥書（句読点を補う）２７オ（Ａ）「一校了」（Ｂ）「本云／保元三年十月十日於白河御房手自書写之。此書慈覚／大師草云々。三井本也。書本文字狼藉歟。　沙門澄憲卅三」（Ｃ）「建保五年八月十三日書校了。為補如来蔵之闕也。／沙門禅寂／以正本重可比校。」２７ウ（Ｄ）「或人云、此記慈覚大師記云々。／私云、広智菩薩奉借書籍於慈覚大師之目録有普賢私記。若此記歟。可尋之。　禅寂」。印記「尾／門」（朱文長方印、１．４×１．９糎、冊首尾）。

本書については池田利夫氏が書写者禅寂の伝記を含め詳細に述べておられる（「鴨長明の大原と日野―禅寂伝に関する新資料管見―」『日本古典文学会々報』一二九、一九九七・七）。それによると禅寂は外題や奥書に出てきた「如来蔵」と名付けられた経蔵を持つ、京都郊外大原の来迎院の第五世長老であった。

奥書（Ｂ）にあるように、本書の親本は唱導で名高い澄憲が保元三年（1158）三井寺の本を写したもので、奥書（Ａ）（Ｃ）は、それを禅寂が建保五年（1217）書写・一校（もう一度親本と見比べて誤字脱字を訂正することか）したことを示す。（Ｂ）に「文字狼藉」とあるように、澄憲の見た本があまりよい本ではなく、当然禅寂も本文に不安を感じていたのだろう、取りあえず如来蔵に無い本であるから写して収めたが、いずれは「正本」（本文が正確な本）と対校すべきだ、としている。本文中に別筆と思われる訂正書き入れがあるのは、後人がそのような作業をしたものか。

さて、著者については、澄憲も禅寂も共に伝聞として「慈覚大師」すなわち円仁としているが、（Ｄ）にはさらに自説として、「広智菩薩」（円仁入唐時の師）が円仁に貸し与えた書物の目録中に「普賢私記」とあるのが本書か、と記している。すなわち円仁著ではなく、円仁将来本である、とするのである。しかし円仁将来本の目録数種には見えない。『仏書解説大辞典』の「観普賢経私記」の項目では、『山家祖徳撰述篇目』の記述により円珍著とするが、一方『観普賢菩薩行法経』（本書が注釈の対象としている経典）の項目では注釈書として「私記一巻円仁」を挙げている。後考を待つ。





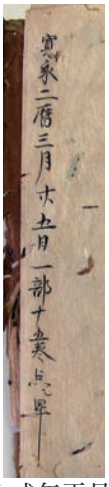
２．駄都法次第（だとほうしだい）　枡形本１冊　文和３年（1354）尊恵写

１５．９×１５．７糎、粘葉装、厚手楮紙。原装本文共紙表紙左肩打付墨書「▲▲法秘」１（▲は梵字の「ダー」「トゥ」）。巻首題「駄都法次第」。墨付２０丁、遊紙なし。四周単辺有界（すべて白界）７行１２字前後、注小字双行、漢文に墨の返り点・送り仮名、朱の句点・合点を施す。本文同筆のミセケチ訂正も見られる。書写奥書「文和三年甲午閏十月二日／書写之訖云々／金剛仏子尊恵」。表紙右下に墨書「長弘」とあり。印記「通海／末葉」（朱文長方３．５×１，９）「詮／明」（朱文方２．４×２．５）（共に表紙にあり）。

一応奥書を書写時のものとしたが、返り点は室町中期まで下るように見えるので、本文と同筆とすると書写年代も下るかもしれない。

駄都は仏舎利のこと。仏舎利を用いた密教の修法の概要を記したものである。このような次第書には枡形本、粘葉装が多く用いられる。尊恵については未調査であるが、「金剛仏子」とあることから真言宗の僧侶であろう。印記に見える「通海」は伊勢神宮祭主大中臣家出身で『太神宮参詣記』の著者としても知られる鎌倉後期の真言僧。

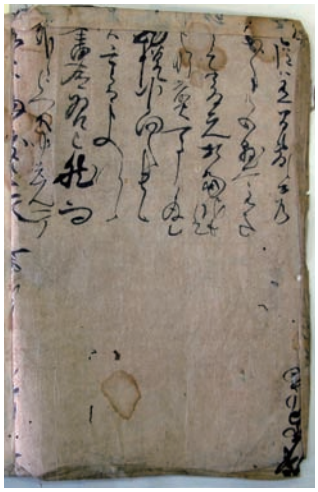
３．〔観無量寿経四帖疏伝通記（かんむりょうじゅきょうしじょうそでんづうき）〕　大本１５巻１５冊　良忠述　〔寛永初〕刊　古活字版



２９．０×２０．０糎、袋綴、楮紙。原装香色二重花菱繋地牡丹唐草型押表紙、押八双あり、裏打紙に文書等の反故を用いる（後述）。左肩に題簽剥落痕あり、なお第２・３・４・８冊には縹色料紙題簽に「▲伝通記〈玄／之〉第二」（▲は「冫」を向かい合わせにしたような四つの点）の如く墨書したものが挿入されている。巻首題（尾題同じ）「観経玄義分伝通記巻第一（～六）」「観経序分義伝通記巻第一（～三）」「観経定善義伝通記巻第一（～三）」「観経散善義伝通記巻第一（～三）」、いずれも直下に「良忠述」とあり。無辺無界９行１９字、注小字双行、字高２３．０糎、古活字版。版心は白口双内向黒魚尾、中縫部「記一　　一」の如くあり（題に応じて「記」「序記」「定記」「散記」と変化する）。墨付丁数、順に53・48・50・40・45・41・47・51・54・57・47・46・54・37・42。

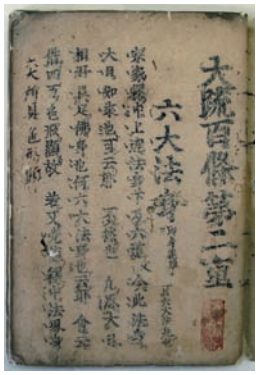
全巻詳細な墨訓点、朱引を施す。各冊末に加点識語あり、第１冊「寛永弍年正月十三日点シ畢ヌ」第１５冊「寛永二暦三月廿五日一部十五巻点シ畢」、各冊表紙または見返等に「学誉之」「覚」「暫説」といった所蔵者の署名がある。印記「〈越前／武生〉光善寺蔵／第二号」（各冊表紙、青インクスタンプ「二」のみペン書）。

各冊表紙の裏打紙として、書状や仏書の反故が用いられている。完全に剥離することができず、また一部裁断されているため、全文を見ることは難しいが、書状については、差出人として「尚誉」「助左衛門」「良伝」「恵論（吟？）」「順応」「利天」、宛名として「残雪和尚」「さんせつさま」「了てん様」「運察公」「阿（？）行寺様」「国生寺様」が拾える。また、運察宛恵論（吟？）書状中に「暫説」の名が見える。このうち国生寺は京都黒谷金戒光明寺の末寺で、戦国時代の創建、中御門京極にあったが寛文３年（1663）内野五番町に移転した浄土宗寺院である。また、所蔵者署名の「暫説」が書状の宛名（「残雪」も暫説の宛字であろう）や文中に見られることから、制作と享受がほぼ一体の場におけるものであった、ということも推定できる



表紙裏資料からその書物の成立を推定する場合、もし表紙を外注しているとすると、本体の制作場所とは異なることになるので注意を要する。しかし、本書については、表紙裏資料と本文書き入れとの共通性から、全体が京都の浄土宗寺院において制作されたと推定できるものである。

４．大疏百条第二重（だいそひゃくじょうだいにじゅう）　半紙本１冊　〔江戸前期〕刊

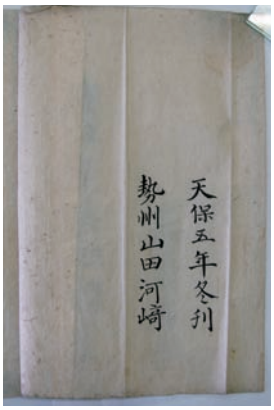


２４．２×１６．０糎、列帖装、厚手楮紙。本文共紙表紙、中央打付墨書「大疏百条第貳重」。巻首題「大疏百条第二重」。墨付４９丁、後遊紙１丁（第一折８紙１５丁、第二折１０紙２０丁、第三折８紙１５丁。各紙オモテノド中央に「疏第二重　上二（～八）」「中二（～十）」「下三（～八）」と紙数を刷る。上一（表紙）、中一および下一・二は虫損のため確認できず）。無辺無界７行１７字前後、漢文、返り点・送り仮名・声点・節博士（一部）を付す。表紙右下に外題と同筆で「関口新八」、裏見返に印判あり。印記「Ｋ／ takashi ／蔵」（赤インク陽刻方印、３．０糎、後遊紙ウラ、亀井孝所用印）。

紙質・内容から、高野版と考えられるが、伝存希少。内容は『大日経疏』の注釈。

５．観無量寿経和訓攷異（かんむりょうじゅきょうわくんこうい）　大本１冊　天保５年（1834）山田・無碍光社蔵版

２６．７×１８．０糎、包背装（ただし背のみ薄灰色の布を用いる）、楮紙。原装納戸色無地、外題原題簽中央無辺「観無量寿経」。巻首尾題「仏説観無量寿経」。四周単辺有界８行１５字前後、かな交じり文、上欄上３．６糎に横界あり、その間にカナ交じり文による注記を施す。末尾に原本の原寸大模刻、紙背書状の模刻（漢文・仮名書状各一通）、桑名仏眼院蔵最澄書写本『観無量寿経』模刻を見本として掲げる。天保５年１２月８日宗淵跋（度会弘琰書）。全６１丁。刊記裏見返「無碍光社蔵板／米堂村霧晴謹刀」。なお、表見返に袋が貼付されており、表に「観無量寿経〈和訓／攷異〉貳本（ママ）／無礙光社蔵板」裏に「天保五年冬刊／勢州山田河崎」と刷る。



本書は京都興聖寺所蔵だった伝後伏見院宸筆の仮名書き観無量寿経を模刻し、その上欄に最澄書写本の訓点に基づく訓読を校異として掲げたもので、紙背は後深草院宸筆と伝えられてきた。原本は明治八年に鵜飼徹定が知恩院に収めて現在に至っており、影印が出版されている（中田祝夫『知恩院蔵本仮名書き観無量寿経　影印と研究』勉誠社、一九九一）。それによると紙背書状は鷹司冬平あるいはその周辺の人物のもので、経典の筆者もそのあたりであろう、とのことである。なお、本書と同じ版本が内閣文庫にあり、上記研究書および勉誠社文庫に影印が備わる。

版木の制作は原本がある京都で行われたであろうが、このような手の込んだ学問的価値のある出版物を地方の結社が自費出版するというのは、江戸時代の地方文化の水準を示すものであろう。

［Ⅱ］近世版本のさまざま

江戸時代の書物の出版は、多くは木版による印刷で、明治２０年代に近代の金属活字による印刷、西洋風の装訂に変わってしまうまで、約２８０年、実に多様で美しい本を作り続けてきました。「古版本演習」という授業で扱った本の一部を紹介します。

６．初登山手習教訓書（しょとうざんてならいきょうくんしょ）　大本１冊　寛永１３年（1636）〔京〕・中野市右衛門刊

往来物（おうらいもの）と呼ばれる、手紙の書き方を教え、同時にさまざまな知識を授け、書道の手本でもあるという、一人三役の書物が、江戸時代を通じて大量に出版、普及した。初期には、いくつかの書状を集めた「古状揃」（こじょうぞろえ）と総称される往来物が多く出版されている。本書もその一つで、前半７丁は「初登山手習教訓書」（他の本では「手習学文之事」あるいは「手習往来」とも呼ぶ）、後半１０丁は「義経含状」である。初期の往来物らしい、大ぶりで細身の鋭い線質で書かれた文字が見られる。家政学者黒川喜太郎（1892―1977）の旧蔵書で、見返（表紙の裏側）に本書に関するメモ書きがある。

７．〔吉原細見（よしわらさいけん）〕　横小本１冊　延享２年（1745）〔江戸〕・鱗形屋刊

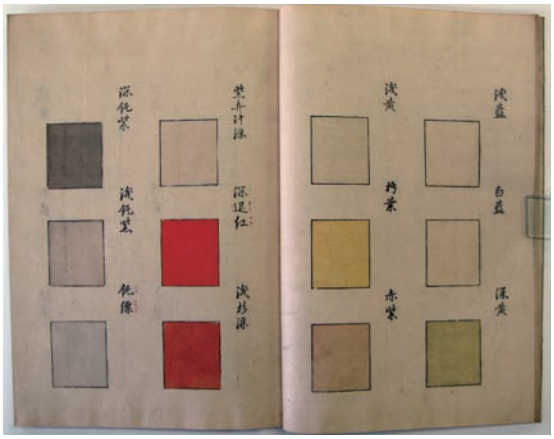
江戸、浅草の北方に作られた幕府公認の遊郭である吉原では、遊女と一流の文化人とが交流し、そこから生み出される文学や美術作品を通して、江戸市中へとさまざまな流行が広がっていった。歌舞伎と並んで江戸時代の都市文化の発信地である。「吉原細見」とは、堀で囲まれたこの別世界への案内書であり、ランク付けされた遊女の一覧が店ごとに記されている。はじめ一枚の地図のような形で刊行されていたが、次第に横小本（横長の形）の大きさに変わり、さらに１８世紀後半には中本（縦長の形）になった。毎年刊行され、使い捨てられるものなので、特に一枚刷や横小本のものは現存数が少なく貴重である。相当痛みが激しかったらしく、旧蔵者（不明、蔵書印は「弗居庵／蔵書」という朱文長方印）によって表紙と帙が新たに作られ、大切にされていたようである。

８．義貞艶軍配（よしさだやさぐんばい）　大本５巻合１冊　八文字其笑・瑞笑作　寛延２年（1749）〔京〕・八文字屋八左衛門刊

１７世紀末、大坂に井原西鶴という作家が出現し、『好色一代男』に始まる一連の浮世草子を執筆、同時代の事件や風俗を扱う本格的な小説――浮世草子（うきよぞうし）の開祖となった。以後、京都を中心にして、その流れを汲むものが続々と刊行されていく。特に、版元の名前を採って「八文字屋本」と呼ばれる一連の浮世草子は、登場人物を極端に典型化したり、同時代の演劇のストーリーや舞台演出を取り入れたりして、人気を博した。本書もその一つで、『太平記』の世界を題材にしている。冒頭に「由利／ニカホ／舛屋／イン内」という黒色・長方形の蔵書印が捺されているが、これは恐らく貸本屋のものであろう。現在の秋田県にかほ市院内（旧由利郡仁賀保町院内）か。

9．色の千くさ（いろのちぐさ）　特大本１冊　田中訥言編　文政元年（1818）跋　〔京〕・採桑園蔵版、銭屋惣四郎刊

本書は『延喜式』や古記録など古い文献に見られる色名を集め、その色を染料によって再現したもので、表面をなめらかに加工した上質の楮紙に、それぞれの色を手彩色で配置している。編者田中訥言（たなか・とつげん、１７６７～１８２３）は名古屋と京都で活躍した大和絵の画家。絵巻物の模写などを通じて古い時代の大和絵の技法を研究し、「復古大和絵」の大家となった。本書もそのような研究・考証の成果であろう。



10．小児全書（しょうにぜんしょ）　大本６巻６冊　安政４年（1857）刊　木活字版

１８０８年にドイツ人ヤーコップ・ハン・フレンキのラテン語による著作のオランダ語訳書をさらに日本語で翻訳、出版したもの。見返と序文以外は、フリガナを含めて木活字により印刷されている。幕末の木活字版は時事的なパンフレット類のほか、医学・兵学・儒学等の学校で用いられる教科書類も多い。訳者の新宮涼民・新宮涼閣は、京都における西洋医学の中心人物であった新宮涼庭（１７８７～１８５４）の養子および義子であり、涼庭の創立した医学学校である順正書院を継承していたので、その教科書として少部数刊行されたか。

11．倭洋妾横浜美談（やまとらしゃよこはまびだん）　中本３巻合１冊　武田交来・録、揚洲周延・画　明治１４年（1881）東京・船津忠治郎刊

江戸時代の読み物のなかで、浮世草子や読本（よみほん）のような文章中心のものに対して、中本（ちゅうほん、現在のＢ６判くらい）で、すべてのページに絵があり、絵の周りに文章を配置する、絵画中心の読み物があった。これを「草双紙（くさぞうし）」と呼ぶ。１７世紀後半に子ども向け絵本として出発し、１８世紀後半からは黄表紙（きびょうし）合巻（ごうかん、長編化したもの）として、明治まで続いた。本書はその最末期に位置するものである。序文によると、『東京絵入新聞』に掲載された記事に基づいた実録であるという。外国人居留地に住むイギリス人コレンスの洋妾（外国人の愛人になった日本女性を当時こう呼んだ）お歌とお芳の争いを、それぞれの下女の忠義や策略をからめて描く。裏表紙に「武蔵新座郡／此主志木宿／勢喜根政七」と書かれているのは所蔵者の署名だろう。

［Ⅲ］歌書のいろいろ

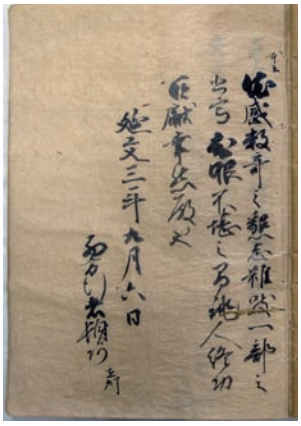
「古写本本演習」という授業で、今年度前期に学生たちに調べてもらった勅撰集の伝本から３点と、近年鶴見大学図書館の蔵書に加えられた私家集、歌合の伝本から４点を紹介します。

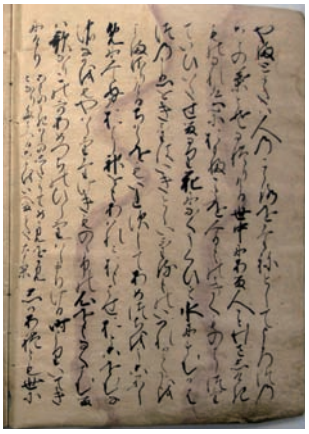
12. 古今和歌集　綴葉装１帖　〔室町中期〕写・伝周興筆

本文共紙表紙（２４．２×１６．９糎）。外題なし。内題、「古今和歌集巻第幾」。料紙、斐紙。一部に雲紙（藍・紫）、染紙（朱・黄檗）を用いる。毎半葉１０行。和歌一行書、詞書約３字下。字面高さ、約２１．４糎。墨付、８折１４６丁。遊紙、前１丁、後２丁。印記、「翠清」（瓢箪形朱印）を遊紙に捺す。

奥書、貞應２年７月22日の定家奥書に次いで、「本云／依感数奇之懇志雖致一部之／書写老眼不堪之間誂人終功／所献幸然殿也／延文三年九月六日／西方行者頓阿〈在判〉」とある。幸然殿は不明。諸本の奥書より、頓阿には元応元年（1319）、観応二年（1351）、文和二年（1353）、写年未詳（嗣公禅師令書写）の書写（令書写）本があることが知られているが、本書と同じ延文三年（1358）の奥書を持つ伝本は他に知られていない。

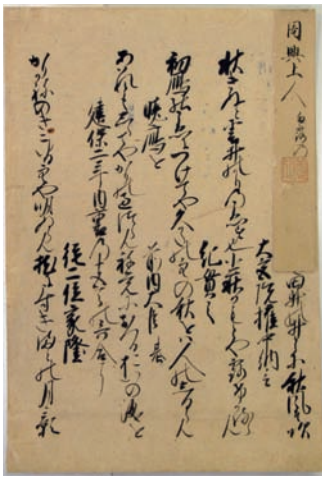
巻末に「右古今集全部律師周興筆跡也／寛永十年／六月十日／古筆了佐（花押）（琴山印）」の奥書極がある。周興は、小林強氏（『古筆鑑定必携』「伝周興筆四半切［新後拾遺集］」解題）、石澤一志氏（平成21年５月和歌文学会例会発表「目白大学図書館蔵・伝周興筆『新古今和歌集』」・目白大学講師、本学非常勤講師）によれば、法性寺（もしくは法勝寺）の律師で、尭孝に学んだ連歌師であったという。歌書を多数書写し、目白大学図書館蔵『新古今和歌集』、愛知県立大学附属図書館蔵『新古今和歌集』、道隆寺蔵『新続古今和歌集』、吉田幸一氏蔵『〔百人一首古註〕』等の他、古筆切が数葉伝わり、本図書館にも参考出陳した『続古今和歌集』の断簡が蔵されている。





＊参考　続古今和歌集断簡　〔室町中期〕写・伝周興筆

法量、２５．３×１７．０糎。料紙、斐紙。秋下の４５７番歌～４６１番歌。神田道伴の極札あり。

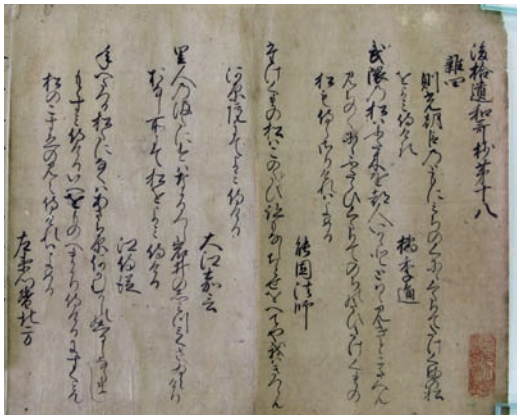


13. 後拾遺和歌集　巻子装・１軸 〔室町末〕写　存巻１８～２０

綴葉装改装の巻子装（２５．４×約８７０．０糎）。内題、「後拾遺和哥抄第幾」。料紙、斐紙（６０紙を継ぐ）。１紙１８行（原装の綴葉装時、毎半葉９行）。和歌一行書、詞書約１字下。字面高さ、約２０．６糎。巻１８～２０の零本で、一部に錯簡及び欠脱が見られる。

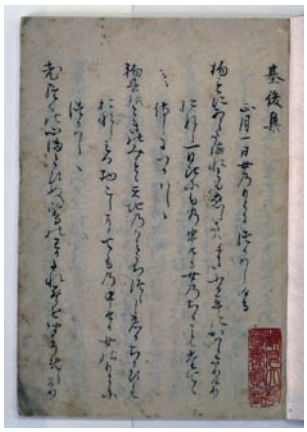
14. 金葉和歌集　袋綴１冊 〔江戸中期〕写

後補海松色裂表紙（２５．８×１８．５糎）。外題、表紙左肩銀泥雲形文様題簽。「金葉集」（本文とは別筆）。内題、「金葉和歌集巻第幾」。料紙、楮紙。毎半葉１１行。和歌１行書、詞書約４字下。字面高さ、約２４．０糎。印記、巻頭、巻末に方形朱印を２顆あるも、重ねて捺されているため、判読できず（下の印は「五雲軒／家蔵印」か）。二度本。



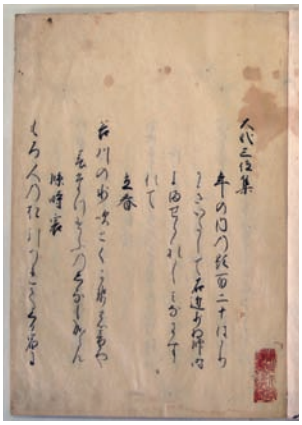
15. 基俊集　袋綴１冊 〔江戸後期〕写

後補香色布目地流雲飛鶴文様雲母刷表紙（１８．４×１３．４糎）。外題、表紙左肩打付書「基俊卿集」（本文とは別筆）。内題「基俊集」（１オ）、「基俊」（２８オ、中古六歌仙所収歌巻頭）。料紙、楮紙。毎半葉９行。和歌１行書、詞書約２字下げ。字面高さ、約１５．５糎。墨付、３２丁。巻末に、「茲散木集貳冊。以僊洞新本謄寫(ママ)出后毎／輪直依／禁裏古本校正為(ママ)蓋自正月一日基俊家乗(ママ)也夫俊頼基俊之二士同世／而生同道而立其名鳴／于一時其統傳于萬古／可謂倭歌之仙矣今合」二集爲全書聊欲有助／觀覧而已／戊寅臘月七日／藤譚玄誌」という、諸本にも見られる奥書がある。藤譚玄は冷泉為景（1612-1652、藤原惺窩男、下冷泉家第八代当主）。「戊寅臘月七日」は寛永１５年（1638）１２月７日。この奥書から、為景により散木奇歌集と合写されたことがわかる。基俊集と合写されている御所本散木奇歌集は現在は失われた（万治四年禁裏焼失時か）為景書写本の複本か。本書は、散木奇歌集より独立し、巻末に中古六歌仙所収歌２８首を付した書陵部御所本（501・743）系統の一伝本。



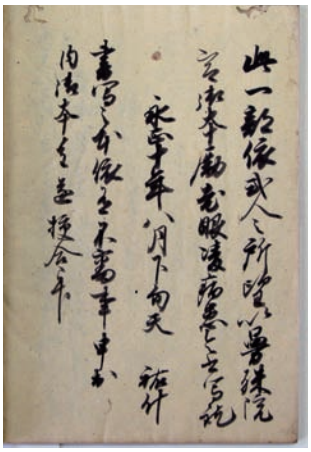
16. 二条太皇大后宮大弐集　袋綴１冊 〔江戸中期〕写

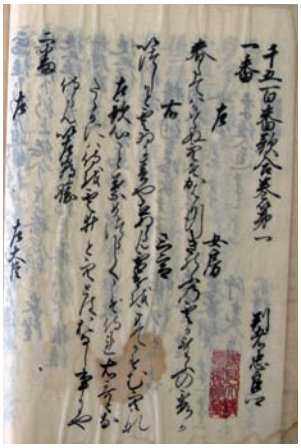
常磐色地紗綾形鳳凰文様空押表紙（２７．５×１９．８糎）。外題、ナシ（題簽剥落の跡あり）。内題、「大弐三位集」。料紙、楮紙。毎半葉１０行。和歌２行書、詞書約２字下げ。字面高さ、約１６．８糎。墨付、４１丁。神宮文庫本等と同様に、内題に「大弐三位集」とあるも、実は二条太皇大后宮大弐集。料紙の上方にかなりの余白があり、底本を忠実に写したものと推測される。巻末に大弐の略歴を付す。

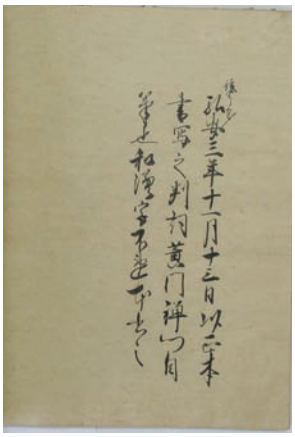
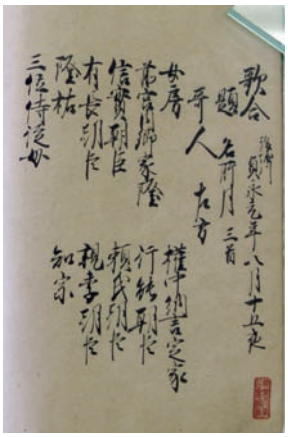


17. 千五百番歌合　袋綴１０冊・〔江戸中期〕写

渋引表紙（２３．５× １６．９）。外題、表紙左肩斐紙短冊「千五百番歌合　巻之一二（～十九二十）」。内題、「百番歌合〈建仁元年〉」（目録）「千五百番歌合巻第一（～二十）」。料紙、薄手の斐楮交漉紙。毎半葉１１行。和歌１行書。字面高さ、約２０．７糎。墨付、第１冊５４丁、第２冊６７丁、第３冊３７丁、第４冊４３丁、第５冊４３丁、第６冊６４丁、第７冊６５丁、第８冊５８丁、第９冊１１２丁、第１０冊４４丁。各冊末に奥書があるが、巻１末の奥書を掲出する。「此一部依或人之所望以曼殊院宮／御本勵老眼凌病患令書写訖／永正十年四月上旬天　祐什／書写本依有不審申出 内御本重遂／校合訖」とあり、以下巻２０までの奥書から、祐什が永正１０年（1513）の四月上旬より同八月下旬にかけて曼殊院宮御本を書写し禁裏御本で校合したことが伺える。祐什は中山宣親（1458-1517）の法名。正二位権中納言。永正三年（1506）出家。新撰菟玖波集の作者。国文学研究資料館史料館所蔵「阿波国徳島賀嶋家文書」に「千五百番歌合中山宣親卿眞筆之折紙并極札・添状」が伝わるが、未見。





18. 貞永元年八月十五夜歌合　袋綴１冊・〔江戸前期〕写

縹色表紙（２１．８× １６．９糎、空押の文様があるも摩耗して見えず）。外題、表紙左肩斐紙短冊「謌合〈題名所月〉」。内題、「歌合〈後堀川〉貞永元年八月十五夜」。料紙、斐紙。毎半葉９行、和歌１行書。字面高さ、約１６．５糎。墨付、２４丁。奥書に「〈後宇多〉弘安三年十一月十三日以正本／書寫之判詞黄門禅門自／筆也和漢字不違本書之」とあり、弘安三年（1280）に某が定家筆本を書写したことを伝えるが、同じ奥書を持つ伝本は他には知られていない。本文は、佐々木孝浩氏の分類（「中世歌合諸本の研究（六ノ上）—『歌合 貞永元年八月十五夜』校本、「中世歌合諸本の研究（六ノ下）—『歌合 貞永元年八月十五夜』について・斯道文庫論集第 37-38 輯・平成 14-15 年）の第Ⅱ類、中でも第二種の永青文庫本に比較的近いが、冒頭に作者一覧を、巻末に成績一覧を付すなど第Ⅰ類に近い特徴をも有している。